

板門店は、朝鮮戦争の停戦による軍事境界線上にある。停戦協定の遵守を監視する共同警備区域であり、韓国（国連軍側）と北朝鮮（中国軍側）は未だ準戦時下にあるわけだ。65年に及ぶ南北分断の歴史の象徴ともいえる板門店、その特別の場所を抱き合う両首脳、微笑みを絶やさず繋いだ手は家族のように離れない：劇的な南北首脳会談、そして平和と繁栄、統一のための板門店宣言：その微笑みが偽りのない本心ならば、米国の中国も介入不要、血族同志が腹を割って、人民が飢餓や強制労働に苦しむことのない普通の国にしてほしいものだ。その道が繁栄でも自滅でも、民族の自決とその自覚に意義がある。中東和平もどこかの核合意も絵に描いた餅であり、帝国が介入すればするほど、未来に禍根を残す歴史を繰り返すからだ。

そもそも北朝鮮は国家として承認されている以上、核保有する主権を有している。現に核保有国であるが、米国の脅威を与えるほどの力はないし、その気もない。その脅威をネタに体制保身と金儲けをしたいだけの話である。

米朝首脳会談のテーマは、半島の非核化？だというのが、「不可逆的」約束など存在しえないのが国際社会の現実ではないか。

日本は蚊帳の外？それで結構ではないか。可逆的な歴史外交や誘拐した人質をネタに金を要求するような国にすり寄り寄る方がおかしい。

韓国ハンギョレ新聞の社説「板門店の春」

## 板門店の春

文 白石茂樹 text by Shigeki Shiraishi

は「非核化の疑念を払拭した」と首脳会談を称賛したが、果たして問題の本質は、非核化なのか？

自国の歴代トップを投獄してしまう「恨」の文化が、あの北の首脳を許せるというのか？非道に公開処刑された北の同胞は、なおさらだろう。

問題なのは非核化？ではなく、万世一系の世襲独裁と主体思想であろう。

現実的には独裁体制の排除でしか、その問題は解決しないのに、一時の高揚感が主体思想の存在をも呑み込んでいる。

「冷戦の終結」や「アラブの春」は、独裁排除の契機となったが、圧政という苦痛の後に、混沌という苦悩をもたらした。そして、その背後には未だ帝国の諜報が蠢いている。そもそも、帝国だけが「春」をコントロールできる、という傲慢と不公平が諸悪の根源だが、そんな現実を嘆いたところで、民族の春は来ない。民族には当然に自決の権利があり、国家であれば主権を有する。

同族として、真に民族の未来を照らす「意思がある」のなら、在韓米軍の撤退と、独裁者亡命の同時着手を自決するしかない。そして、亡命者の英断を不可逆的に断罪しないことも肝要だ。非核化の茶番では決して「板門店の春」は来ない。歴史を裁くことを止め、恨を乗り越えた民族の自決こそが、春を開く唯一の扉であろう。



### Profile

安全保障・教育評論家／1964年、福岡生まれ。関西学院大学法学部卒業、横浜市役所、議員秘書を経て現職。著書に『概説戦後学校教育』『武徳教育のすすめ』。



美楽での連載を束ねた百念撰集  
「雲涯蒼天」  
定価700円  
Amazonにて販売中